

福祉論の基礎をなす幸福範疇－幸福感と反省・総括の働き

近藤良樹

1. 快適さの感情

幸福感は、感情である。この幸福の感情をカントは、「快適さ Annehmlichkeit」(註1)とか「満足 Zufriedenheit」(註2)と言い換えている。不幸な状態、不幸せを思うとき、感情的には、不快であり、悲哀や苦悩・苦痛を感じる。反対の幸福感は、確かに、快適で、ころよく、満たされた安らかな心的状態になるものであろう。

しかし、快適で満足してということだけであれば、それは、「楽しさ」とか「喜び」の感情も同じことである。喜びや幸福感は、感情の快感系列に属するものとして似通ったものがあるが、喜びと幸福とは同じではない。ことさらに喜ぶようなことがなくても、幸福感は可能だし、幸福とは感じていなくても、個々の事態については、喜んだり悲しんだりしているのである。

喜びや楽しさは、特定の個別的な状況・ことがらにかかわっての、そのときの個別的な感情である。喜びは、価値あるものが新規に自分の所有するところとなったことを確認して、この特定の個別的な事態に有頂天になっているものであり、楽しさは、自分の生の発揚を実現してくれている現在の個別的状況に反応してうきうきしているものであろう。

これに対して幸福は、「自分の青年時代は、幸福だった」とか、「短い一生でしたが、あの子は、幸せでした」と、人の青春時代とか一生を全体として反省しているのである。幸福感は、個別的な状況についてではなく、多くの個別的な事態を総括した一全体への判断・評価をするところに成立する感情であらう。

マックス・シェーラーは、至福(Seligkeit)と絶望(Verzweiflung)について、これは、個別的な「なにかについて ueber etwas」の感情ではなく、「それらは、特殊的な体験内容全体を《貫く durchdringen》」(註3)ものだと特徴づけているが、幸福感は、喜びや楽しさのような個々の「なにかについて」ではなく、これを越えて、それらを総括したところに成立する「快適さ」になるのであろう。シェーラーは、ふつうの「幸福 Glueck」や「不幸 Unglueck」は、「喜び froh」や「悲しみ unfroh」とともに、個別的な「なにかについて」感じるものにしていて(註4)、幸福と不幸は、彼のいう「至福」と「絶望」がそうであるように、個別的な「なにかについて」を越えているものとみなすべきではないか。

シェーラーは、成層をなす感情を低いところから、A)感性的な感情－B)身体的・生命的感情－C)心的(seelisch)感情－D)精神的(geistig)感情と区分する(註5)。A)感性的な感情は、身体の部分に局所化された、感覚器官に対応しての快不快の感情になり、B)身体的・生命的感情は、身体の部分に局所化されることから解放されてその全体で捉えられるもので、「疲れ」とか「爽快さ」のようなものがそれになる。C)心的感情は、身体を越えて心身をもつての自己が世界へのかかわりをもつところに生じる。人間的な生活の各個別的な事態に対応してのもので、いわゆる喜怒哀楽がそれになる。D)精神的感情は、そういう個別事態を貫く全体的なものについての感情に

なる。A)感性的な感情と B)身体的・生命的感情は、身体の部分と全体についての感情になり、C)心的感情と D)精神的感情は、人間的社会的生活の個別部分と、普遍的全体についての感情ということであろうから、シェーラーの分類は、整合性のあるものになりえているといえよう。

ただし、幸福の位置付けには、問題があるように思われる。幸福感につらなる感情を、彼は、低いものから順に、気持ちよさ(Sinneslust, Behaglichkeit)ー喜び(Freude)ー幸福(Glueck)ー至福(Seligkeit)等とならべ(註6)、あるいは、高いものから、「至福」「幸福 Glueckseligkeit」・「喜ばしき Froehlichkeit」「いい気分 Wohlgefuehl」「感性的快 sinnliche Lust」等々と並べているが(註7)、その場合、先の四つの成層にむすびつけては、「至福」と「幸福」とを別の層になるものとして区別する。「至福」は、普遍的全体的なもので、D)の精神的感情にするが、「幸福」は、そうではなく、喜びなどと同じく個別事態に対応しているものとして、つまり C)の心的感情に位置付けようとしている。しかし、幸福と不幸は、「不幸な青年期」とか「幸福な一生」などと言うように、個別的な「なにかについて」ではなく、それを越えた全体的普遍的な場面での感情としてある。「喜び」が個別的対象にかかわってのものであるのに対して、幸福は、そういう層を越えたところにあるものとして、至福と同じ層に位置付けるべきであろう。

ヨーロッパでは、古代ギリシア以来、至福(makarios)と幸福(eudaimonia)が区別され、特にキリスト教では、不幸のまじりけのない永遠の宗教的な純粋幸福である至福(Seligkeit, blessedness)と、有限で偶然的な幸運としての幸福(Glueckseligkeit, happiness)とは区別されるのが一般的である。シェーラーも、その区別をとり、かつこれを大きく捉えて、四つに大別された感情の中の、C)の心的感情とD)の精神的感情にとこれを振り分けたのである。しかし、至福と幸福の区別は、幸福のなかでの区別であって、喜怒哀楽の個別的な事態への感情一般からいうと、至福も幸福も普遍的全体的なものへの感情として、同じものになるというべきではないかと思う。

2. 生の一全体についての満足感

幸福感、「幸せ」という感情は、感情であるかぎり、自分のおかれた状況や客観についての価値判定、認識が一方にあり、他方では、それに対応する心身の反応・かまえをもつことになる。たとえば「怒り」の感情は、その怒りの対象となるものを腹立たしい気障りなものと判定し、これに攻撃的な構えをとるものであろう。腹立たしいものに対して腹をたてるのである。そのようなかたちでいえば、幸福感とは、幸(さち)を得て、幸せ(しあわせ)と感じているものだといえよう。つまり、豊かな富み等の、欲求を満たすことのできる価値あるものを所有していて、その状況を「めぐみ」と評価して、そのことに見合うように、心身が満足し充足したかたちでのかまえをとることであろう。

ただし、特定の幸(さち)・富みを獲得しての直接的な感情は、「喜び」になるのであって、それのみでは、「幸福」とはならない。幸せは、はじめにふれたように、個別的な事態をつらぬく、持続的全体についての反省をもって、その間の持続的な幸(さち)についていわれるものであろう。つまり、幸不幸の成立には、時間的には持続的な長い一まとまりの経過があり、生の諸側面・諸

層の総括的な一全体というものが形成されていて、これが対象となっていないわけではないわけである。

カントは、「幸福」の主観的な在り方を「快適さ」だといい、それを、喜びや楽しさのように個々の事態へのものではなく、それらをつらぬいて、その生の全体に持続的にともなっているところのもので、いわば総括的なものとみなして、次のようにいっている。「幸福 *Glueckseligkeit*」とは、「生の全体的な現存在 *ganzes Dasein* に、不断に *ununterbrochen* 伴う、その生の快適さ *Annehmlichkeit des Lebens* についての理性存在者の意識である」(註 8)と。個々の状態に反応しての快適さではなく、幸福感は、ひとの「生の全体的現存在」「現存在全体」に、「不断に」持続的にともなうものだという。確かに、幸福感は、個々の「なにかについて」の快感ではない。「青年時代は、幸せだったなあ」と想起してそれにひたるとき、人は、その青年期の個々の出来事についてではなく、それらをつつむ「全体」を全体として総括的に価値判定して、「幸多く」「恵まれていた」とみなして、それに心地よさを感じ満足感をいただくものであろう。

幸福な人の自身の幸福な状況の価値判定はというと、「幸(さち)」「恵み」に満たされていると了解しているわけであるが、この方面からは、カントは、つぎのように幸福をとらえている。「幸福 *Glueckseligkeit* は、理性存在者の現存在の全体 *Ganzen seiner Existenz* において、あらゆるものが望みや意志どおりにいっている *alles nach Wunsch und Willen geht*、この世における理性存在者の状態である」(註 9)と。幸福と思うとき、ひとは、個々の事柄についてではなく、自分の生の「全体」に関して、基本的に、欲求するものが充足され所有できていて、「あらゆるものが望みや意志の通りに」なっていて、満足できる恵まれた状況にあると判断しているというわけである。自己の生の一全体について、それは、時間的な一まとまりであり、構造的な一まとまりをなすものであろうが、この一全体を反省してみても、何から何まで「すべて」とはいかないにしても、基本的根本的なところにおいて「すべて」恵まれているとみなすとき、そう自己了解しているところに成立する一全体への「満足 *Zufriedenheit*」(註 10)に幸福感はなるのである。

3. 反省をもつての快適さ

幸福感は、人の生の個々の状態を貫いたひとつの全体を対象とするわけだが、それに見合うところの動きはというと、これをふりかえり反省して、その全体への基本的な価値評価を下して、それへの心身のかまえをつくるものになる。したがって、ふりかえり反省する働きの未熟なこどもは、教え込むのでもなければ、ふつうには、「幸せ」とは、発言しない。喜怒哀楽の感情は、個々の状況をとらえてその意味を理解し、それへの心身の反応をもつものだが、これは、成長とともにこまやかに発達し、こどもにおいてすでに十分に見い出すことができる。しかし、反省をふまえての感情である幸福感をいただくことは、つまり、こどもが「わたし、今、とても、幸せ」というようなことは、まずないといってよい。大人ならば「とても幸福だ」と述懐するであろうような、生活の快適さがあり、欲求も十分に満たされていて充実しているとしても、こどもの場合、それへの個別的な感情はもちえて、「楽しい」とか「嬉しい」「すてき」「気持ちいい」等とは言っても、「幸福よ」とは、言えない。「幸福」といえるようになるには、それらの全体をふり

かえり総括し、反省することができなくてはならないからであろう。あるいは、自分の存在に対して一步距離をとり、自己を突き放して見つめることができるのでなくてはならない。幸福感は、いわゆる自我が確立し、反省能力をもち、自己意識・自覚を有することがあって可能となる感情になるのではないか。大人から評価すると、当のこどもは、「幸福」であったり「薄幸」であったりするのだが、こども自体は、「喜んだり」「悲しんだり」はしても、自分の生についてこれをふりかえり、一步距離をとって反省するということはできず、そのかぎりにおいては、「幸福」とも「不幸」とも感じてはいないのだといわれねばならない。こどもは、「幸福である」ことはできるが、「幸福です!」と発言することはできないのである。

ヘーゲルは、「幸福」を、「反省する思考によってもたらされた durch das reflektierende Denken hervorgebrachten 普遍的な満足の表象」(註11)と規定している。幸福感は、個々の状態への個々の直接的な反応としての喜怒哀楽等とちがい、それらの各状態・状況を一まとめにして振り返り反省するところに成立するものである。諸状態を貫いた全体についてのもので、個々の個別的な状況からは離れ、一步距離をおいてふりかえり反省する、その意味で媒介的・間接的な感情になるのである。ヘーゲルの「反省する思考」によるという幸福の規定は、そのことを的確に示しているものといえよう。

先にカントは、幸福感を、全体をなす生の快適さについての「理性存在者の意識 das Bewusstsein eines vernuenftigen Wesens」(註12)と捉えていた。カントでは、「理性」は、悟性のうえにそびえて、これを総括し導く高い理念的な能力として捉えられている。個別事態に対応する「悟性」的な活動のもとにある喜怒哀楽の感情などちがって、幸福感は、それらの個別の事態を越え、これを総括したところに、それらに対しては間接的媒介的なかたちで現われる「理性的」な意識として成立するものだということである。「反省」を介してのものというヘーゲルと同じ捉え方であるといつてよいであろう。

この反省という、幸福感成立の前提をなすわれわれの心の働きからいうと、人は、幸福よりは、不幸の方を感じやすいのではないかと考えられる。だいたい人が、「反省しています」と言うのは、悪いことをしたときである。良くない結果をみて、その原因を「反省してみる」のである。不幸な状態は出来れば避けたいから、人は、その現実の不幸の一因子をなしている個別的な事態についても、その全体についても、これから距離をとりがちで、意識し反省していく機会をつくりやすくする。われわれは、事柄がうまくいっているときは、つまり幸福と結び付くような事態においては、それにのめりこんで前に前にと進んでいき、反省などする暇はない。しかし、不幸となるような否定的な結果をもたらしたときには、どうしてこうなったのだろうと反省をしていくことになる。幸福について、しばしば、それは、一生懸命生きているとき、ふと「随伴」するもので、目的となるものではないといわれることがある。しかし、不幸は、ふと意識されるだけの随伴するものとなることもあろうが、これは、当人には反目的になり、なんとか避けたいものであるから、幸福とちがって、意識され注目される度合いが大きくなる傾向にあるといえるのではないだろうか。

「反省」によって幸福が成立するというにかかわることだが、ひとによっては、「幸福な

のかもしれないが、実感がともなわない」といわれることがある。喜怒哀楽と同じく、幸福感は、感情となるものだが、喜怒哀楽は、それが意識されるときには、同時に心身にそれとして実感されるのがふつうである。しかし、幸福は、知性の反省において、「おそらく恵まれている、幸いな幸せな状態にある」と冷静に判断するにとどまって、感情とはならないことが少なくない。ひとは、幸福であっても、そう反省することは少なく、幸福と反省したとしても、その感情をかならずしも持たないのである。喜怒哀楽の感情など、例えば、怒りは、明確な感情で、腹立たしい状況に遭遇してその気になると、すぐに心身の反応をもって、怒りの感情として実感される。それでも、「腹のたつ奴だなあ」といいながらも、実際には怒りにまで進まないこともある。怒りになっていく前のころの過程において、気障りだと知性が判断して、そこから懲罰を加え攻撃すべきだと考えたとしても、そこまでにとどまって、心身が短絡的原始的に退行して攻撃的に身構えをつくっていかないかぎりには、怒りの感情とはならない。その知的な展開と怒りの心身反応は区別可能である。幸福感の場合、「恵まれていて幸福なのだ」との知的な反省と、それをふまえての「しあわせだなあ」との心身の感情的な反応との距離は、個別的現実の対応しての喜怒哀楽などに比して、かなり大きく、遠いように思われる(多幸症とか宗教的に特殊な心理状態にある場合は、幸福だとの反省は、すぐに感情としての幸福感に結びつくのであろうが)。

4. 総括して、その全体を評価・判定

われわれは、幸・不幸をいうとき、「色々あったが、まずは幸福な青年時代だった」とか、「仕事はうまくいかなかったし、子供は家出するし、病気がちだったし、さんざんな、不幸な人生だった」等という。人の生きている個々の事態・状況についてではなく、人の一生とか、子供時代というような、一まとまりの全体について問題にしているのである。その全体のなかでは、苦悩したり、絶望したり、喜怒哀楽の多彩な生活が送られているわけだが、それらのことをふまえながら、その全体そのものの根本的なところは、総括的に捉えられたその一全体は、「めぐまれていた」というべきか、「不運で、めぐまれたものではなかった」というべきかと問い、これについて判定を下して、幸不幸をいうことになるのである。

自分をめぐっての現実の個別的な諸事象をふまえながらも、その一々についてではなく、しばしば、ながい期間の全体について、自身の幸不幸の判定をするのである。ここでは、まずは、一つのまとまりをもった時間的経過の全体をふりかえり継起的な総合統一をおこなう。あるいは、空間的構造的に諸部分・諸層からなるものを全体として一つのものとして総合統一し総括することが必要となる。と同時に、その全体の基本的な特性がいかなるものであったのかという評価がなされなくてはならない。自分のこれまでが幸福だったのか否かをふりかえって反省するとき、個々の事件・状況をともなうことは当然あるが、しかし、それにはとらわれず、基本的なことがらで、つまり「健康」とか「仕事」あるいは「家庭生活」などが、どうだったのかということに関心を集中させるのが普通であろう。生活の基本をなすいくつかの側面について、その各普遍的で持続的な、生の肝要な事態を、その期間のはじめから終りまで通覧し、総合し総括して、その側面での統一的な判定をするのである。そのうえで、それらの諸判定を総括して、とどのつまり

は、自分は、自分のこの人生は、恵まれていたと言えるのかどうかと、最終的に総括して統一的なまとめの評価を出していくのであろう。もちろん、この過程は、必ずしも、意識にのぼるものとはなっていない。われわれのこのころの展開のうち、意識される部分は、氷山の一角にすぎない。それでも、幸不幸を決定するような重大な個別的な状況については、意識しながら、反省し、総括していくものであろう。

当時の自分の「経済状態」がその間恵まれていたとか、「家族関係」がそのあいだ恵まれていなかったと総括し、大病をして出世できなかったことは、その不運は振り返るたびに悔やまれてならない等と反省し、総合的に判定していくのである。とどのつまりは、男の人生は、仕事であり、これで満足できなかったから、「おれの人生は、不幸というべきだろう」とか、大病をしての不満はこのころが、しかし、いい女房と子供にめぐまれて、そして、家庭的なめぐみこそは、人生の幸不幸のかなめであって、つまりは根本的には「めぐまれていたのだ」と評価すれば、「俺の半生は、幸福だったといわねばならない」と総括し反省するわけである。

5. 比較し振り返って

反省するとき、幸福か不幸かと、つまり「めぐまれていた」のか否かと判断するのだが、そこには、自分のそういう全体が恵まれていたのかどうかの比較の基準をなすものがなくてはならない。同じような境遇にあっても、一人は、「至福」を感じ、一人は、「ま、幸福なのか」と思い、一人は、「自分ほど不幸なものはない」と感じるようになるのが通例で、なにを当人が比較の基準にとるかによって、まるで反対の自己評価をしてしまうことになる。比較する基準は、各人の楽観的か否かというような性格や気質によって異なるし、当人の生活史によっても異なってくる。その家の人達が昔から恵まれているとしたら、基準値はおのずから高いものになることであらう。

感情は、それを感じる当人がその対象なり状況への価値判定をしたものについて、心身の反応をとまなうものだが、かりにその価値判定が誤りであっても、その判定通りの反応をする。たとえば、「喜び」の感情なら、当人が楽観的すぎて、まだ当選は可能性にすぎず決定されていなかったとしても、「当選した」と早とちりをしたら、とにかく当人のそういう判定にしたがって、本当に喜びを感じて(あとからは「ぬか喜び」だったとなるのだが)、嬉々として優越・勝利の姿勢をとり、余剰となったエネルギーを非攻撃的な形で放出するために躍り上がったりするという「喜び」の感情にとらわれることになる。幸福感も同様で、いくら客観的には豊かな幸に「恵まれている」としても、当人が「恵まれていない、不運だ」と判定したら、それに見合うかたちで、心身は反応して、萎縮し、生はなかば停滞して、不幸のかまえをとることになる、つまり「不幸」と感じてしまうのである。

自分たちの生の幸不幸は、時間のなかで展開されるものであり、反省し総括する対象は、基本的には、過去の方角に見い出され、自分なり人の歴史を反省していくことになる。比較の基準になるものは、自身の人生のなかでは、反省対象になる時期に先立つ時代がとられて「あの頃の自分に較べたら、今は何と幸せなことか」となったり、多くのばあい、平行的に展開されている別

の平均的とみなされるひとに比しての恵まれ具合ということになる。戦争の時代であれば、自分がひどい目にあっていても、まわりのひとと同様の悲惨さを体験しているので、「自分は、不幸だった」とは感じない。しかし、それが自分のこどもや孫の世代との比較になってくると、時代の不幸として、「不幸だった」となる可能性が高い。あるいは、もっと視野を広くとって歴史のなかでということになると、それでもまだ食料はあったから、古い時代の飢饉のなかでの生活に比べたら、めぐまれていたというべきで「不幸とはいいいにくい」というようになっていく。同一人のもとでも、幸不幸は、比較の対象となるものが異なることで、まったく反対の評価になることも生じるわけである。

自力歩行のできない青年が、電動の車いすに特殊な工夫をしてもらって、生まれてはじめて、自分ひとりで近くの海を見に行くというような福祉関連のテレビ番組を最近見た。車いすから海をながめながら、かれは、「とても、幸福だ」と大満足であった。「これ以上は望まない、そんなことしたら、ばちがあたる」とまでいって、幸福感にひたっていた。かれが比較の基準を五体満足なほかの青年にとっていたとしたら、自身の身体の不如意に不幸を思い、自力で電動いすをもって散歩できたとしても、満たされることはなかったであろう。しかし、かれは、自身の、自力では動けなかった過去のつらい日々との比較のもとに、普通の青年には当り前の、自分一人での散歩が可能になったことに、そのごくささいなことに、大感激していたのである。至福ともいえるような幸福の笑みをテレビは、映し出していた。

比較の基準は、自身の過去や周囲の人に求められるのが普通だろうが、それには限られない。極端には自分の現在が基準になることもありうる。ながい時間的展開のなかでの生の基本的な「恵み」への総括・反省をもって幸不幸は成り立っていくが、その時間の持続は、ときには、未来をもふくんだものとなり、これへの想定される評価もふくまれることになる。自立した生活の能力のない精神障害者を子にもつ親は、「いまは、幸福」と判断したとしても、自分たちが死んでしまったあとのことを思うと、それを現在の状態とくらべ、現在を比較の基準とすると、不幸を意識せざるをえなくなることであろう。そして、もう一度、自分たちの生の営みを振り返り、その子の将来のことを思うと死ぬに死にきれない思いにとらえられ、その子供がうまれてからの親子の一生は、なんと不運なことだと全体について「不幸」を感じてしまうことになるかもしれない。

6. 「刹那」の「幸せ」「幸福」は、では言わないのか

ところで、幸不幸が反省・総括を介してなるのだとしたら、そして、ある一つの全体をなすものについて、つまり、通常、ながい期間についての反省としてあるものだとしたら、「刹那の幸福」は、どうなるのかといわれるかもしれない。寺山修司の『幸福論』は、刹那の快樂に幸福を見い出している。‘映画館で若尾文子とマスターベーションにふける’ような快樂に幸福があると説いている(註13)。ときに、われわれも、「今が幸せならいいじゃないか」とか「いまは、幸せよ」と確かに言う。そこには、反省も、長いまとまった全体となるような時間もないように思われなくもない。

一仕事して汗をながしたあと、縁側で、庭からくる風を全身に感じながら遠くに鳴くひぐらしの音を耳に、冷えたビールをぐっと飲みほして、ふと、「最高に、幸せだ」と言うようなことがある。そこでは、「ながい時間」への「反省」などは、ないように思われる。だが、「幸せだ」といっている場合、ビールが「たまらなく、うまい」と言っているのでも、ひぐらしの音が耳に「心地よく、ものがなしい」とか、風が「気持ちいい」と言っているのでもない。「うまい」とか「ものがなしい」「気持ちいい」というのなら、確かに「反省」することなく、自分ののどや味覚にさわやかな刺激を感じ、聞こえてくる個別的な現実の音に風に心地よさを感じているのであろう。だが、そこで、「幸せだ」と言う場合は、そういう個別的な現実から一步距離をとり、ふりかえり、その諸事実からなるいまの全体を全体としてとらえているのではないか。ごみごみした町の、冷房のために締め切った部屋との比較をしたり、病気でビールの飲めなかった去年のことをふりかえりながら、現在の自分を取りまくもののめぐみを思い、反省をし総括的に判定して、その集約点としての「いま」を「最高にしあわせだ」と表現しているのではなかろうか。とすれば、一つの全体をなす時間もふまえているし、総括し反省することも前提になっての発言とみなされることになる。

だが、愛する人とふたりきりになって、「このまま時間がとまってしまえばいいのに、いま、世界一、幸せ！」などというときも、長い時間経過の全体とその間のことについての反省といったものがあるのではあろうか。ここでもやはり、浅薄とはいえ、「反省」は、あるのだと考えられる。当人が単に恍惚として「すてき」とか「うれしい」等のその場に直接感じる感情を表明するのではなく、「幸せ」「幸福」というかぎりは、反省的な思考を、ある程度は働かせているものとみなされる。だれよりも今の自分は「めぐまれている」と判断しているから「幸福」と感じるのであり、それには、他の者との、あるいは現在と過去の自身の「めぐみ」についての比較反省があるはずであらう。あるいは、その恍惚状態なり、快樂状態なりにのめりこんでいるのみではなく、これに一步距離をとるところもあって、この快樂・恍惚感を可能にしてくれている恵みへの反省があって、「幸せ」となっているのではないか。

もちろん、その反省は、ごく限られた浅薄なものではあろう。それが不幸のはじまりとなるかもしれないことは冷静なときには意識するのに、そういう客観的な思考・判断力は麻痺状態にしているから、刹那の現在に意識を集中していて最高の幸せが感じられることになっているのであろう。それでも、その現在については、「いい車に乗れて、あこがれの彼を独占して、一緒においしいものも食べられて、それに今日は体も調子よく爽快で、おまけに、天気もいいし」等と、都合のよいもののみをもってではあろうが総括的に反省して、恵まれていて幸せと感ずることになっているのではないか。

ただし、時間については、かならずしも、ながい時間である必要はないであらう。幸不幸というような反省・総括がなるには、個別的な諸事象をふまえて、ある程度のながさをもち一まとまりの時間を形成していて、「青年時代は、幸福だった」とか、「幼児期は、不幸だった」等ということになることが多いが、「反省」「総括」とちがって、そういう長い時間経過が不可欠というわけではない。刹那のことについても、その個別状況から生じる直接的な感情をふまえながら、こ

れから一步距離をとってそれを総体として反省して「恵まれている」かどうかの観点から捉えるなら、そこには、「幸せ」「ふしあわせ」がいえることになる。「きみといる今は、しあわせだ」と刹那の幸福をいうことがありうる。寺山修司の‘若尾文子とのマスターベーション’も、そこに、「一世代前の青年は、戦場にいたが、いまの自分たちは、こうして平和に快樂にひたることができ、ありがたいことだ」等と反省の入り込む余地があったのであれば、若干「幸福」や「反省」のことは汚すような気がするけれども、「幸福」なのであろう。

なお、「幸せ」と「幸福」は、区別されるべきかもしれない。「幸せ」は、「幸福」よりも、つよく感情的・陶酔的であろう。また、一場面一局面に即して、つまり時間的な持続のないところで言われるのは、幸福よりは、幸せになるであろう。とはいえ、しあわせも、やはり個別的な現実から一步距離をとった反省的思考をもつての感情であることは、幸福と同様であろう。これに対して、「幸福」の方は、より反省的全般的評価をしてのことであり、一層総体的で、全局面において長期的視野のもとでいわれる傾向がつよいのではなかろうか。あるいは、陶酔的傾向は低く、より穏やかなものということもできるであろう。

少し角度をかえて見るならば、「幸せ」と「幸福」のちがいということでは、前者の幸福感が、しばしば、「反省」にはじまるのではなく、それに先立つ何らかの「快感」に支えられていることを指摘できるであろう。先行するすばらしい快感があって、これにおされ、これを機縁として、この快感を可能にしてくれているその全体の恵みを総括的に反省していくならば、幸福感になる。これを「幸せ」というのである。例えば、おいしいものを腹一杯たべて、「今夜の夕食は、とてもおいしかった」と単純に快感を総括するにとどまらず、さらにその満腹感にあとおしきれながら、ふとんに足をなげだして、このことを支えてくれている恵みを手短かに総括・反省し、満腹感にひたりつつ「ああ幸せ」とつぶやくのである。この場面では、「幸福だ」とはあまりいわない。

「幸福」になるには、起き上がって、正座しなおし畏まって、健康と生活のゆとりを思い、アフリカの早魃地帯のことを想起し、しみじみと感じていくものになる。そのときには、もう満腹感は背後に引っ込み、もっぱらの「反省」とこれのもたらす「幸福感」ということになる。

つまり、「幸せ」の方は、多くは、まず、これに快感が先行し、その快感のすばらしさに押されての、恵みの反省と幸せ感情ということになる。この「幸せ」は、先行する諸種の大きな快感に支えられ、これと一つになって感じられる反省的満足感で、一場面的感情的陶酔的となる。「幸福」の方は、この先行する快感はないか、あってもそれとはしっかり距離をとって、より包括的で全般的長期的反省のもたらす穏やかな感情ということになるのではないか。もちろん、「幸せ」は、幸福に属するもので、単なる快感ではない。先の飽食の例でいえば、おいしい料理に「もう、腹いっぱい」と感じるまでは同じでも、肉親の死など不幸に結びつくような状況下にあるとしたら、それにつづけて「幸せだなあ」と進めることはない。「幸せ」は、いくら大きな快感に押されていても、それにとどまっていけるものではなく、それから一步距離をとって反省・総括をしているのである。つまり、「幸せ」は、あくまでも「幸福」なのである。

7. 主観的幸福

幸福は、個々の事態・状況に対応した直接的な感情ではなく、個別的諸事態を貫いて、それらの総括される全体について、反省することをもって生じてくるという、間接的媒介的なものなので、客観的な事態そのものとは距離ができやすく、幸福の感情は、喜怒哀楽などに比して、そのひとの現実そのものから離れた、それにはかならずしも相応しないものにもなりがちである。つまり、恵まれているのに不幸とったり、みじめなはずなのに幸福感にひたっていたりということになりやすいのである。

人の主観は、現実を誤まるとらえ、錯覚することしばしばである。幸福感も、恵まれた客観的状态に対応して、主観的に満足を感じて、「幸福だ」ととらえれば正解なのであるが、そういう素直な展開は、しないことがむしろ多い。まわりからみると、悲惨で不幸そのものと感じられるひとが、「至福」にひたっていたり、めぐまれすぎていると思えるようなひとが、「自分ほど不幸な者はいない」と感じていたりするものである。

幸福感は、ひとによって大きく異なってくる。同じ感情でも、喜怒哀楽は、個別事象に対応してのもので、ことさらに抑圧したりしなければ、その事態に応じて、そのままこれを自然に生じることになる。したがって、周囲からみても、当人が新規の価値を獲得したことが分かれば、喜んでいるはずと判断できるし、気障りなことが生じていることがわかれば、怒っていると容易に推察できる。

喜怒哀楽の感情も、現実を誤解したり曲解して、あるいは、過敏・鈍感に反応してと、客観の事態にふさわしい正確な反応をしないことも、当然ある。だが、幸不幸の感情の場合は、それらとは、質を異にした、つまり、現実の個別事象への直接的な反応ではなく、個別事象そのものから距離をとって総括し反省したものとして、間接的、媒介的なものになっているという、もう一段別の過程をもつことで、一層、現実とは離れた、現実への反応をしがちなことになる(これは、否定的なばあいのお話であり、積極的にいえば、現実から離れるのではなく、反省は、現実の表相を離れて、現実の一層普遍的で全体的な本質・内面に肉薄していくのである。幸不幸の感情は、この反省をふまえて、人の生の普遍的で全体的なその本質・核心を捉えたものとしてあるというべきである。しかし、否定的にいえば、ばあいによると、現実から一層はなれたものになる面ももつということである。そして、幸不幸では、この否定的な、現実から離れてしまった側面が目につくのである)。

一般的に感情は、その人の性格・気質によって影響され、その感受性・発現にはかなりの違いがでてくる。幸福感のばあい、それが一層おおきい。楽天的なひとは、よほどのことがなければ、自分の人生を幸福と感ずることであろう。悲観的で欲深い人と聞けば、それだけで、彼は自身を不幸と捉えているであろうと推定される。この世に『幸福』論と題した書は数多くあるが、その中身は、大部分が「どうしたら幸福になれるか」というものになる。読者もそれを求めて手にするのがふつうであろう。つまりは、その類書は、客観的に恵まれていなくて不幸な人とか、本当は恵まれているのに幸福感のいだけない人とかのために、主観的に幸福になれる方法を説いているのである。客観的な豊かさ・幸にはかかわりなく、当人しだいで、主観的に、「恵まれている」と解釈できさえすれば、万人、幸福になれるということである。

みじめに不幸にすごしてきたひとは、そのみじめさがなくなって普通の人並みの生活ができるようになったというだけで、「バラ色の幸福な今」と感じるようになる。逆にめぐまれた境遇にあった人が、人並みの生活にひきおろされたら、「なんと不幸な自分か」となげくにちがいないのである。これは、まだ、上昇と下落の事実に見合ったもので、客観的な根拠のある幸不幸の感情になるが、その人のものの捉え方のちがいで、同一の境遇、同一のその変化であっても、一方は幸福に他方は不幸に感じる事が可能である。幸不幸を反省し比較するそのとき、比較の基準をどうとるかで、欲深い者は、まだまだ恵まれてはいないと判断し、無欲な人は、「ありがたいことだ」と捉える。前者は、「いつまでも、自分は不幸なことよ」と自身をとらえ、後者は、「おれには、幸福がついてまわる」と感じるようになるはずである。

客観的な幸福、つまり「さち」「めぐみ」に満ち足りている場合に、主観的に「不幸」を感じているのも、悲惨な現実にもかかわらず「幸福」と思うのも、いずれも、現実を誤解し現実の事実にくさわしくない感情をもっていることになる。だれもが多かれ少なかれ、そういう誤解をもっているのであろうが、その乖離が度外れな場合、とくに後者の場合、人の注意をさそうことになる。豊かな幸にかこまれた前者のばあい、思いをあらためるなら、即座に幸福になれるし、現実的に幸福でめぐまれているのだから、主観的に不幸を感じていようとも、大したことではなく、同情など引くまでのことでもない。だが、後者の場合、不幸の現実を幸福と捉えているのでは、不幸からの脱出の試みられることがなくなり、現実の不幸は、そのままに、そのひとのもとに定着してしまうのである。彼は、おそらく現実を直視していないから、不幸と思わないのであり、主観的な幸福を維持するために、ますます現実から逃避して、その主観のみの世界にとじこもり、幸福の幻想をいだけているだけの方向に進んでいかざるをえなくなることであろう。

その一つの極端は、宗教的な至福であろう。現実には、しいたげられ、みじめな生活をしていても、自分は神に選ばれていて天国に行くことが保障されている幸せものと解することができる。周囲の人は、その人の現実的な不幸を、つまり、貧困で病気で家庭的にも悲惨な状態で、あわれさをさそっていても、当人は、至福感にひたっていることができるのである。それは、現実のみじめさからの逃避でしかないとまわりは見ているとしても、当人は、主観的には、幸せ者と自身をとらえることができるのである。「宗教は、人民の阿片である」とマルクスはいつたが、そういうことになる。しかし、阿片の常用者は、自分を「幸福」とはみなさないであろう。恍惚として快楽に身をゆだねているとしても、それをもって、「気持ちいい」とか「うっとりする」等と快楽の表現はするとしても、「幸福だ」というまでに麻痺し錯倒した意識にはならないであろう。自分の人生を反省しての発言となる幸不幸については、おそらくは、阿片常用者は冷静にふりかえって、「不幸」と自身を評価できるのではなからうか。

だが、宗教では、現実の不幸を、天国の神の至福にいたる、幸福への手段・ステップととらえて、その不幸を大きな幸福のなかに包含して、とどのつまり自分は「幸福だ」ととらえていくことになる。「貧しいものは幸いだ」「悲しんでいるものも幸いだ」等、(この世の)不幸は(あの世の)幸いだというようなことを宗教は説く。幸不幸は、主観的なもので、わざわざ不幸ととらえることはないといえ、そうかもしれないが、現実の不幸をそれとして直視し、その克服(そ

れが不可能な悲惨な不幸のあるのも確かであるが)へと現実のうちで立ち向かうことを避けている点では、ほめられたものではないであろう。

8. マッチ売りの少女

現実には悲劇的で不幸なのに、幸福感にひたっている場合、やりきれない思いを周囲にあたえることになる。だが、現実的な不幸の克服が不可能な場合、不幸に思うよりは、幸福感にひたりながら、幸福のうちで最期を迎える方がましになる。薄幸のひとがその不幸の悲惨の末に、最期、幸福の幻覚をいだきながら死んでいくという、悲しいハッピーエンディングは、幸福な人生をもとめてやまない人間の最期に残された夢になるのであるろう。

アンデルセンの「マッチ売りの少女」の話もそういう悲しいハッピーエンディングをもつ話であった。この少女は、厳冬の歳暮れ、幸福に酔ったひとびとのいきかう街頭で、冷酷な親にマッチ売りをさせられていた。だが、それを買うひともなく、厳冬の街頭で彼女は動くこともできなくなり、うずくまって小さな暖をとろうと、マッチをすった。そして、そのあたたかな明りのもとに、幸せな幻覚をみることになったのである。マッチをするとやさしい祖母があらわれて、この少女をあたたかくだきしめてくれたのである。「もう、苦勞することはないよ」とだきしめて、少女をやすらかな世界へとつれていってくれたのである。翌朝、町の人は、この少女がやすらかに微笑みをうかべて凍死しているのを発見したのであった。

一人寂しく凍死するという不幸な客観的事実にもかかわらず、少女は、やさしい祖母にあたたかく抱かれて、永遠の幸せ・至福のなかへと安らかに眠っていったのである。アンデルセンは、その主観的な状態を「Glaede」（註14）と形容している。このことばは、「glad 喜び」ということであるが、happy（幸福）という意味にもつながるものようである。作者が「幸福」と形容しなかったとしても、彼女の最期の主観的な状態は、「幸福」「幸せ」といわれてよいものであったと解釈されて差し支えないであろう。

もちろん、こどものことであるから、反省し総括するという能力にかけているかぎりは、本人自身は、「幸福」と発言できるような心的状態にはないというべきだが、彼女の状況をもってするとき、これを理解する大人の読者は、まちがいがなく、幻想のなかでのことではあるが、主観的には「幸せ」に死んだと捉えることであろう。「もう心配いらない」「もうしかられずにすむ」と、苦しみから解放されて、あたたかに優しい祖母にいだかれて安らかに短い薄幸の生を終えることができたのである。あるいは、もう、明日からは、寒さにふるえながら、マッチなど売らなくてもいいのだ、祖母のもとであたたかな部屋で一緒にすごせるのだと、未来への新しい人生へのゆめを見ながら、ほほえみながら「幸福」に息絶えたのである。

現実には、悲惨な凍死という不幸の極にしながら、幻想としての幸福のなかに死ぬという、やりきれない幸福である。不幸な恵まれぬ現実にいる場合、主観的にも不幸を感じるのがふつうである。マッチ売りの少女たちも（それは、現代のストリートチルドレン等におきかえてもよいであろう）、その多くは、悲惨な現実にみあうように、めぐみのすくない現実の苦痛・苦悩にみだしながら、息絶えていくのである。いずれにしても、現実の不幸な死をのがれることができ

ないのであれば、苦しみながら最期を迎えるよりは、幻想であろうと錯覚であろうと、せめて安らかな幸福な未来を夢みながら、その悲惨な生を終えられる方がまだましであろう。悲惨な、幸福である。

註

- 1) Immanuel Kant; Kritik der praktischen Vernunft. 1787. S. 40.
- 2) ibid. S. 212.
- 3) Max Scheler Gesammelte Werke. Francke Verlag. Bd. 2. S. 344.
- 4) ibid. S. 345.
- 5) Vgl. ibid. S. 334.
- 6) ibid. S. 110, 247.
- 7) ibid. S. 332.
- 8) Kant; Kritik der praktischen Vernunft. 1787. S. 40.
- 9) ibid. S. 224.
- 10) ibid. S. 212.
- 11) Georg Wilhelm Friedrich Hegel; Enzyklopaedie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830). § 479.
- 12) Kant; Kritik der praktischen Vernunft. 1787. S. 40.
- 13) 寺山修司 『幸福論』 筑摩書房 1969年 参照
- 14) H. C. Andersen Samlede Eventyr og Historier. Skandinavisk Bogforlag. s. 273.

平成10年11月 『ぷらくしす』（広島大学文学部倫理学教室・西日本応用倫理学研究会）1998年秋号 67~84頁